

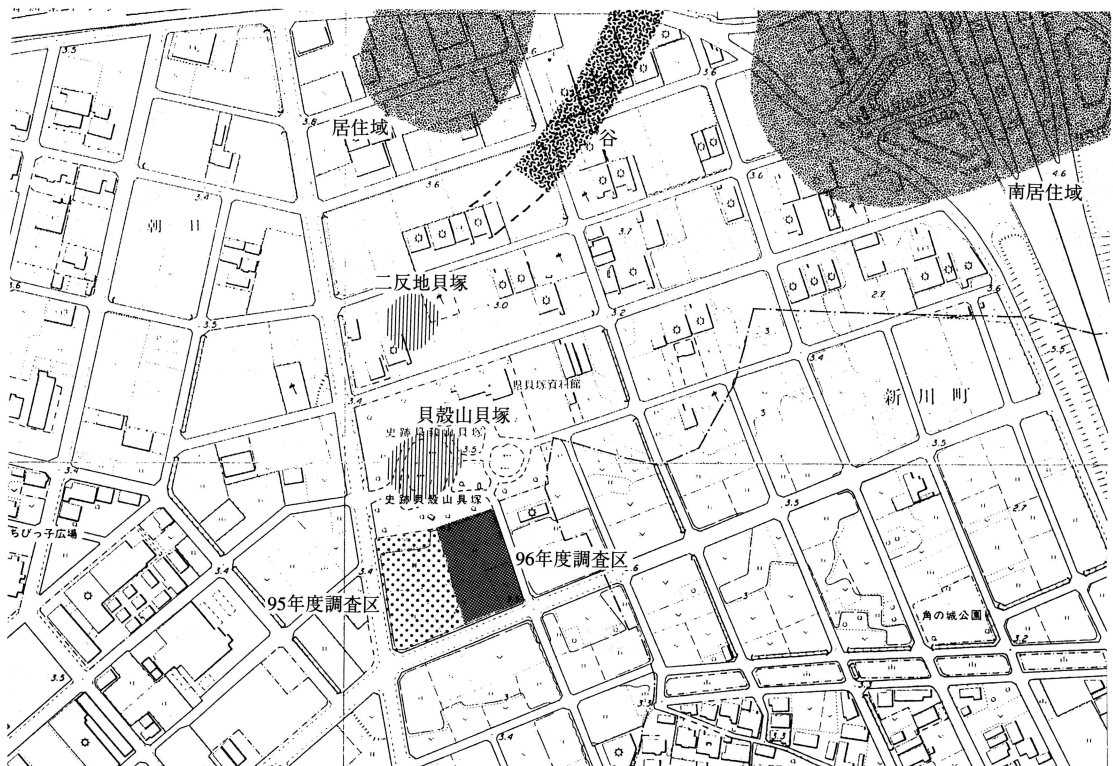
あさひ 朝日遺跡

調査の経過 朝日遺跡は西春日井郡清洲町を中心に、南北約1.1km、東西約800mにわたって広がる東海地方屈指の弥生時代集落である。昭和44年から平成元年にかけて愛知県教育委員会、財団法人愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査部、財団法人愛知県埋蔵文化財センターによって約90,000㎡が発掘調査されており、平成7年度も隣接部分（2,774㎡）を本センターが調査している。

今回の調査も昨年度と同様新資料館建設に伴うもので、調査面積2,773㎡を愛知県教育委員会の委託事業として実施した。調査区は、弥生時代中期～後期の環濠集落から500m程南西に位置し、前期の著名な貝塚である貝殻山貝塚の南にあたる地点となる。

調査の概要 平成7年度の調査では、鎌倉・室町時代～江戸時代にかけての方形土坑群・溝、古墳時代の古墳群、弥生時代前期の溝・貝層・竪穴住居、中期～後期の溝・貝層・方形周溝墓・土器棺・埋葬人骨・竪穴住居が検出されたが、今年度の調査区においてもほぼ同様の状況で遺構が展開している。ただ昨年度の調査区では、幅3m前後の大型の溝は東西方向に走るもののみであったが今回新たに南北に延びる溝が検出され、人骨も土坑に埋葬されたものの以外に、溝内に埋葬された事例も確認された。

本文では、『朝日遺跡Ⅴ』（1994 愛知県埋蔵文化財センター）の時期区分にのっとり、Ⅰ期→弥生時代前期、Ⅱ・Ⅲ期→中期前葉、Ⅳ・Ⅴ期→中期中葉、Ⅵ期→中期後葉、Ⅶ・Ⅷ期→中期末～後期で報告している。



第1図 調査区位置図（1：5000）

弥生時代 S D101は昨年度の調査区で、ほぼ東西に延び、北西隅で北方向にゆるやかな弧を描いて
I 期 屈曲するが、今年度の調査区ではそれとは対称になるように北東隅においてゆるやかに北に曲がっており、貝殻山貝塚を囲むように走ることが判明した。この溝は幅3～4 m、深さ1～1.5mを測り、昨年度の調査区の北西隅の屈曲部分にあたる地点には、最大幅1.4mの純貝層を含む貝層（ハマグリが主体で、次にカキが多い）がみられたが、今年度の調査では確認できなかった。ただ埋土上層には粗いザラザラとした橙褐色砂層があり、溝がある程度埋没した段階に溝全体に貝の廃棄が行われていたものと考えられる。S D101はI期後半に掘削され、II期初頭にはほぼ埋没してしまっていたようである。またS D101と平行する、深さ30～50cmの溝S D56からは多量のI期土器が出土した。

弥生時代 ほぼ東西に走るS D102と、やや弧状に南北に走るS D14・68がある。S D102は幅3～
II期・III期 3.5m、深さ1.2～1.5mで、I期末～II期に掘削され、III期には埋没しているようである。S D14は幅3.5～4 m、深さ1.2～1.5mを測り、南側では最大幅90cmのハマグリ主体の貝層が10 m以上にわたって続いており、灰褐色砂層とその上層である貝層の境界部分にまとまった土器の廃棄がみられた。S D14と平行して走るS D68は、14に比べひとまわり小規模で、遺物の出土は少ない。

弥生時代 S D103とS D104はS D102とほぼ同規模の溝で、102の南側を平行して走り、S D68の
IV期・V期 南にはS D18がある。また、さらに南東には方形周溝墓S Z101～104が作られている。S D103と104は同時に掘削されたわけではなく、103→104の順で作られているようで、方形周溝墓群は103と、S D18は104と同時期であると考えられる。方形周溝墓のうちS Z104の南溝と西溝の溝底より19・22号人骨が出土した。これらの人骨は溝底に穿たれた楕円形の土坑に埋葬されており、22号は屈葬で、19号は後世の影響を受け一部の部位が移動しているためはっきりしないが、屈葬である可能性が高い。また22号とした位置より脚部が出土しているが、これもS Z101に伴うものであると考えられる。IV期後半にはS D104・18は埋没しつつあり、部分的に貝を中心とした集中的な廃棄がみられた。また、S D17（第2図）のように埋没途中の溝の窪地を利用して溝や土坑を掘削したり、新たに別の場所に廃棄溝・土坑を設けたりすることが顕著になる。

弥生時代 VI期には調査区北西及び昨年度の調査区北半が居住域となる。今年度の調査区では一部
VI期 しか出土していないが、居住域の南に多量の土器を出土する溝・土坑が一定の方向性をもって配置され、さらにその南にIII・IV期の方形周溝墓を再利用した方形周溝墓群が存在し、マウンド上に土器棺が置かれる。居住域中の黒色砂層内からは多量の当該期の遺物が出土し、一部竪穴住居も確認されたが、詳細な遺構の検出は困難であった。

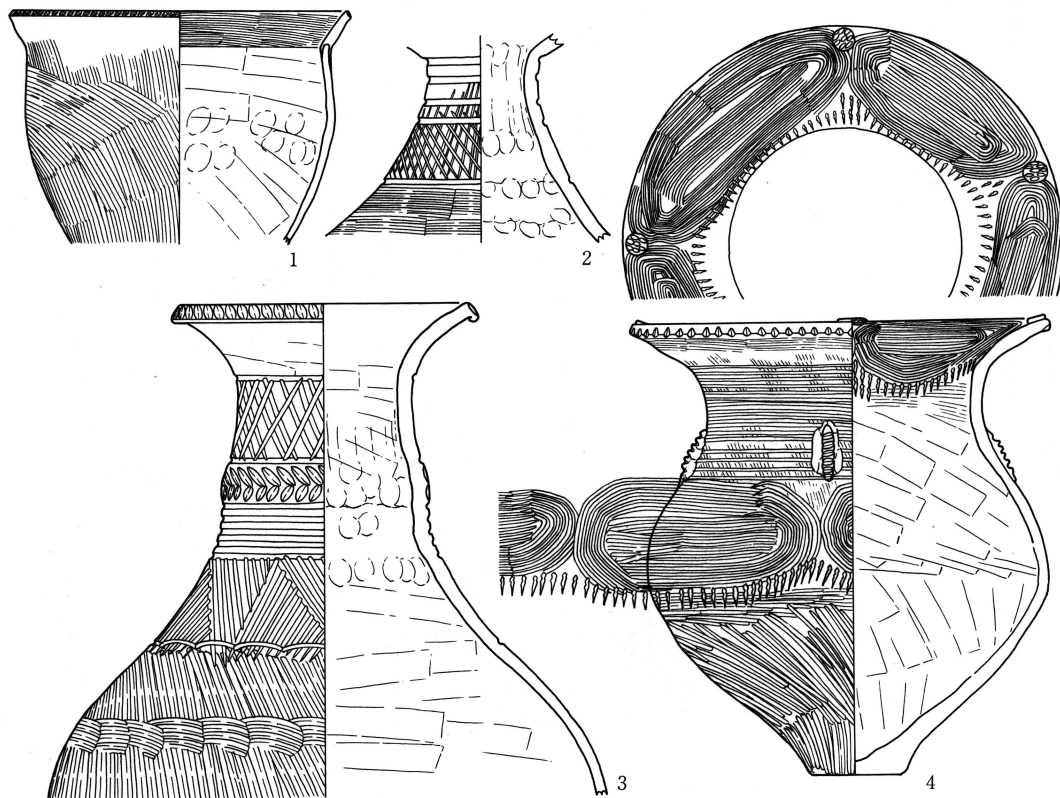
埋葬人骨 埋葬されたと考えられる人骨が10体出土し、うち3体はIII・IV期のものとなる。それ以外の7体と昨年度調査で出土した10体は、S D104及びその同時期の遺構が埋没してしまった後に埋葬され、上部には古墳時代中期の包含層が覆っていた。これら17体の人骨の埋葬されていた土坑からは、確実に時期を決定できる遺物が出土しておらず、前述の遺構の検出状況からすると、VI期～古墳時代前期のものとなる。ただもう少し時間幅をしばって考

えると、屈葬であることや、遺跡の展開からみて、ⅥまたはⅦ期～Ⅷ期初頭のものと推定される。人骨は方形または隅丸方形の土坑に、手脚を折り曲げた屈葬姿勢をとって埋葬されている。土坑には、13・14・16・18・20号人骨にみられるように、埋葬土坑の外側に堀肩があり二重の土坑となっているものがあることや、昨年度調査の3号人骨では仰向けのまま脚を折り曲げて埋葬され、その後腐敗して大腿骨と脛骨・腓骨が交差した状態で出土していることから、木棺が使用されていた可能性が考えられる。

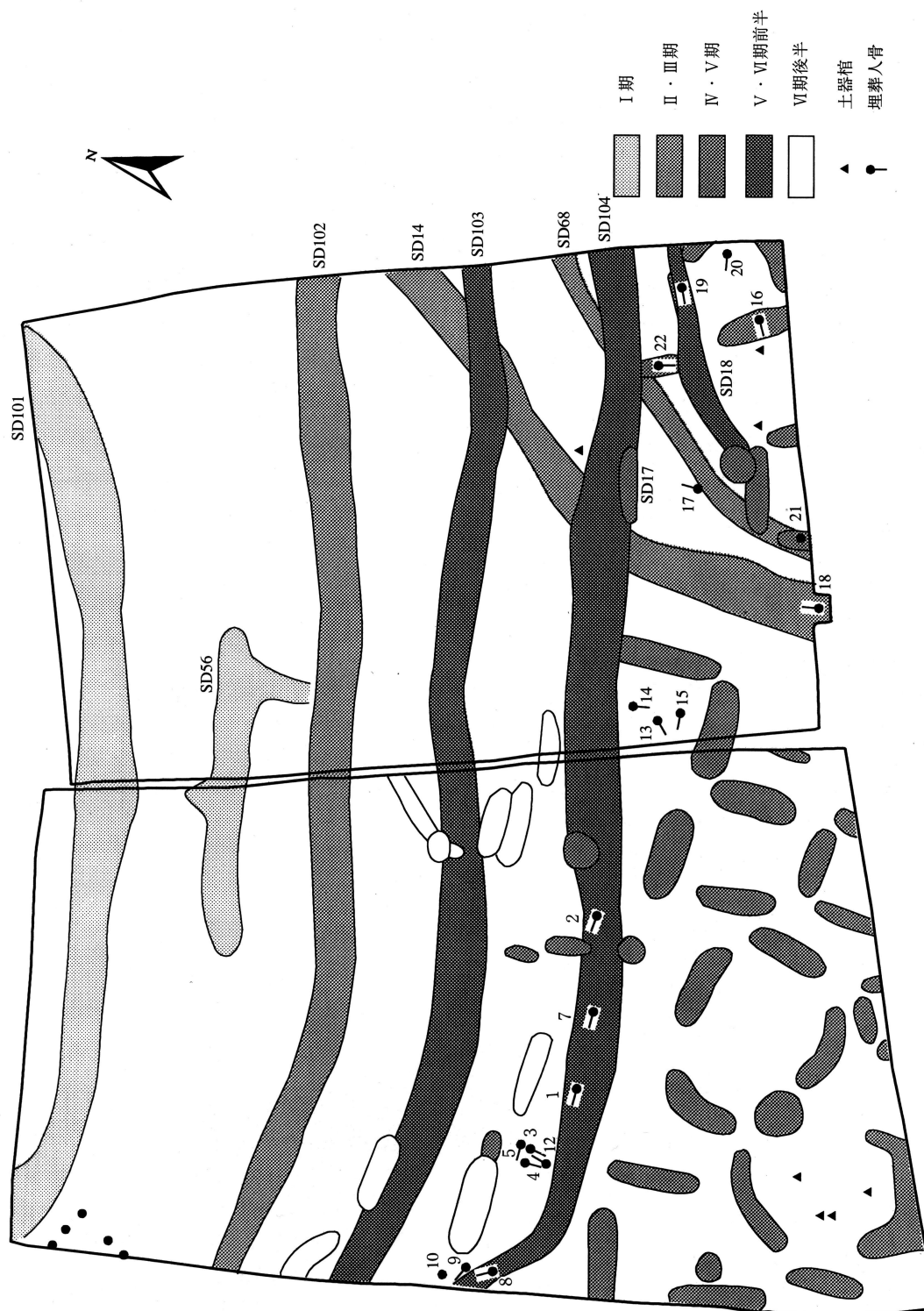
弥生時代 Ⅶ期～Ⅷ期初頭にかけた方形周溝墓が5基、調査区中央から北にかけて検出され、こ
Ⅶ期・Ⅷ期 れで昨年度調査のものと合わせると12基になった。これらは径10～12mの大きさで、周溝を接するように作られている。周溝は1～3ヶ所途切れるタイプで、溝隅では上部が途切れていないが、非常に浅くなっているものがみられた。また、方形周溝墓のみられない北側には、土坑や溝があり、供献土器のような状態で太頸壺・高杯・器台が出土している。S Z 09からは合子形土器、10からは線刻太頸壺、12からは記号紋太頸壺が出土した。

古墳時代 新たに隅丸方形の古墳が9基検出され、昨年度のものと合わせて28基となった。また古墳群の北側より台付甕が3個体出土している。

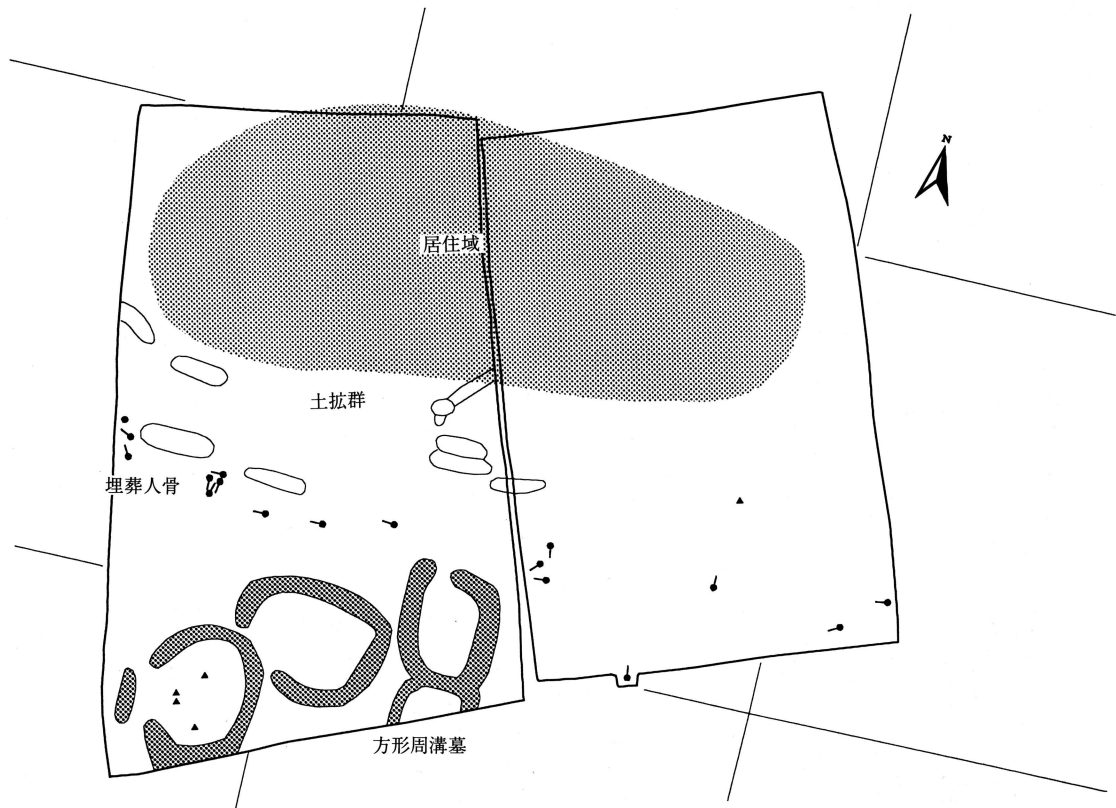
中世以降 17基の方形土坑が検出され、昨年度のものと合計47基になった。ただ今年度の調査区内には江戸時代に下がるものは確認できなかった。



第2図 SD17出土土器（1：4）



第3図 I～IV期主要遺構図 (1:400)



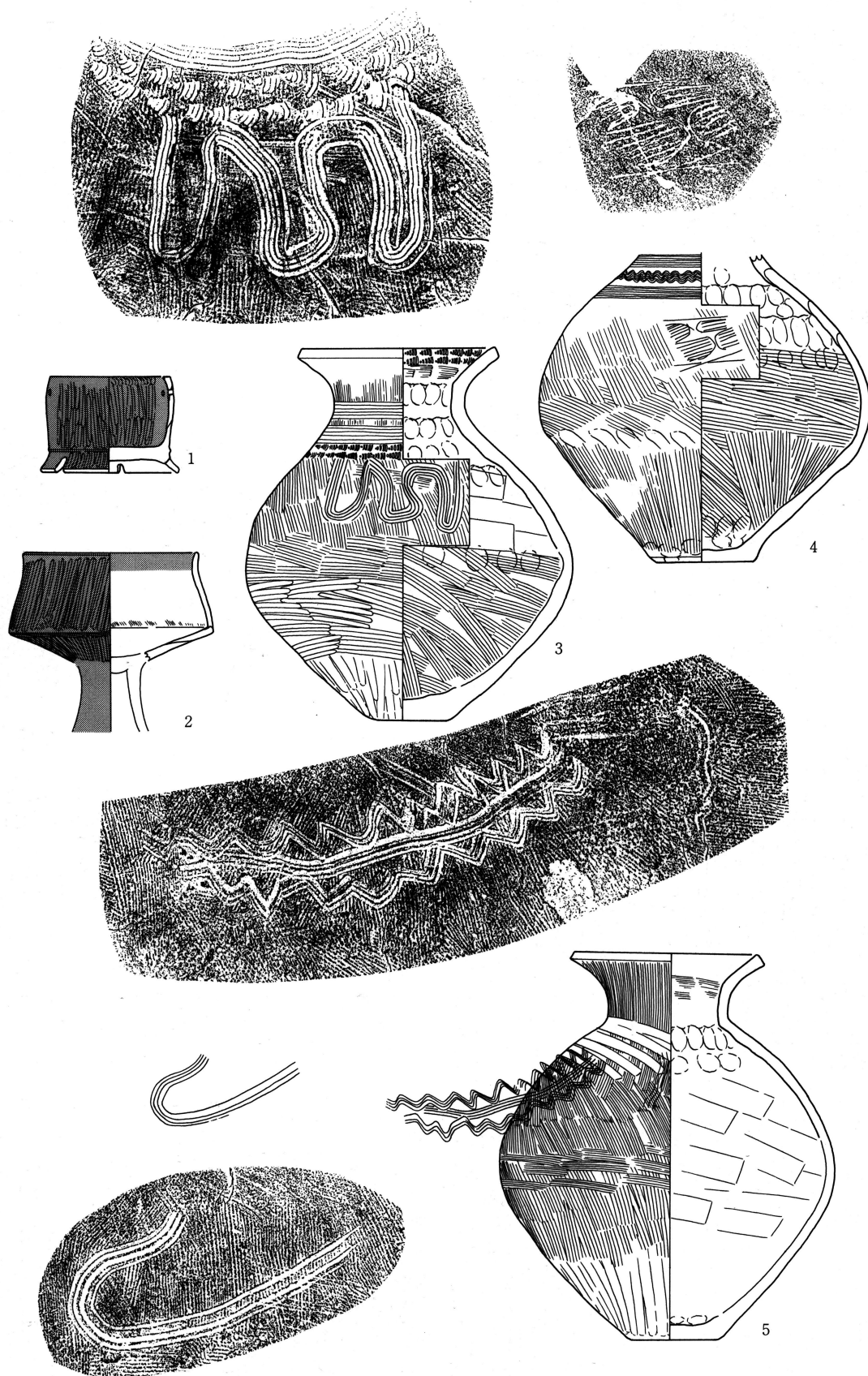
第4図 VI期主要遺構図（1：800）

- まとめ
1. 弥生時代前期の良好な資料を含むS D101が貝殻山貝塚を囲むように検出され、この時期の居住域にも環濠が巡る可能性が高くなった。
 2. 遺跡中心部の南居住域に走る区画溝と同様の大規模な溝が遺跡南西にも存在することや、同時期の新たな墓域が確認された。また、調査区が遺跡の端部に位置することに起因すると思われるが、中心部ではあまりみられなかった溝・土坑への貝・土器の廃棄が顕著であった。
 3. 過去の調査でははっきりしなかったVI期の集落のひとつのタイプを想定することができ、この時期に遺跡に大きな画期があることが再認識された。集落は調査区内で居住域・土坑群・墓域が納まるようなコンパクトなもので、同時期に出現してくる小集落との関係が注目される。
 4. 20体もの埋葬人骨がまとまって出土したのは今回初めてであり、弥生人を解明する資料として貴重なものとなろう。またこれらの人骨がVI期の集落に伴うものなのか、VII期～VIII期初頭の方形周溝墓群に属するものなのかは今後の課題となる。
 5. 今まで不明な部分が多かったVII期～VIII期初頭のまとまった墓域が初めて明らかになり、合子形土器や線刻・記号紋太頸壺などの特殊な遺物が出土した。

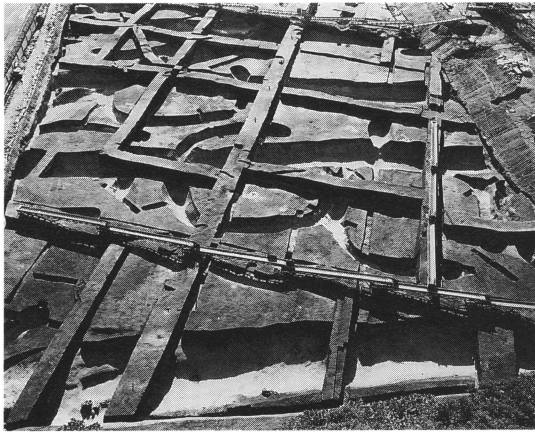
（宮腰健司・原田 幹）



第5図 VII～VIII期主要遺構図（1：400）



第6図 VII・VIII期方形周溝墓出土土器（1～5は1：4 拓本は1：2）
1・2. S Z09 3. S Z12 4. S Z10 5. S Z02



S D 101~103、S D 14



S D 14貝層、土器出土状態



S D 17土器出土状態



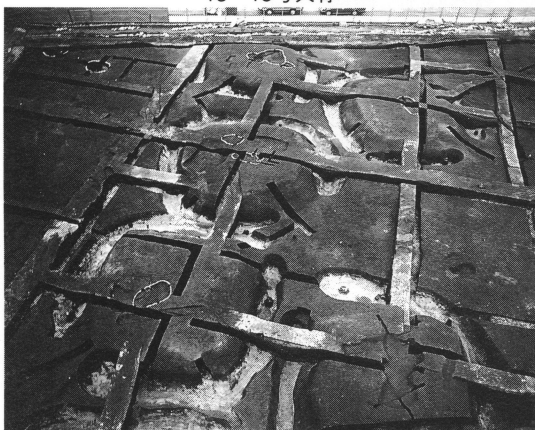
19号人骨



13~15号人骨



20号人骨



VII・VIII期方形周溝墓



S Z 10周溝内土器出土状態